

國學院大學學術情報リポジトリ

俗語になった漢語

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今野, 真二, Konno, Shinji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000036

俗語になった漢語

はじめに

山田俊雄は『日本語と辞書』（一九七八年、中公新書）の「六 辞書の中の漢語の姿」において「漢語とはいっても、実は、すべてがいわゆる難解な漢語ではなくて、極めて一般的な庶民の程度でも十分に使ったり書いたりすることのできるものも少くはなかったと思われる。というのは、明治初期において見てもほぼ同じことが言いうるかと思うが、漢語は漢字の裏付けをもたなくても存在しうる状態になる、また別な言い方をすれば、

漢字離れをして、口頭言語の中でも普通になってゆくものがあって、それらはいわば漢語の層の下の方に次第に累積し沈殿してゆく」（二二五頁）と述べる。

ここに「漢語の層」という表現が使われている。多賀糸絵美「草双紙の漢語語彙―層別化の試み―」（『国語語彙史の研究 三十一』二〇一二年、和泉書院刊）は、草双紙で使われている漢語が、明治期刊行の国語辞書に掲載されている漢語、江戸末期に刊行された早引きタイプの『節用集』に掲載されている漢語、漢語辞書において（見出し項目として採りあげられるのではなく）語釈に使われる漢語、と重なり合いをもつ漢語である

今野真二

ことを精緻に検証した上で、草双紙に使われている漢語群がそうした「平易な漢語と重なり合いがある」ことを指摘している。その指摘は適切な方法によって裏付けられており首肯できる。

山田俊雄（一九七八）も多賀糸絵美（二〇一二）も「俗語」という表現は使っていないが、本稿では、一歩進めて、「俗語となった漢語」の存在を指摘することを目的としたい。江戸時代から明治時代、すなわち近代語の時代を観察対象とする。そして、これまで具体的にはほとんど検証されていない『俗語雅調』、『雅俗／俗雅』日本小辞典」を明治期の文献として採りあげ、その「内実」を紹介する目的もかねて、「俗語となった漢語」をできる限り具体的に掲げながら論を進めていくことにする。

その言語を書くための文字をもっている一つの言語に関して、(どのような呼称を使うか、またその呼称によってどのような言語態をとらえるかということはひとまず措くとしても)「話しことば」と「書きことば」とを設定することは一般的である。「俗語」はそうした分け方とは別の概念であるので、「書きことば」について「俗語」の存在を認めることもできるであろう。しかし、本稿においては、ごく粗いみかたであることを自覚した上で、「俗語」をもつばら「話しことば」側のものと

みておくことにする。

一 江戸時代の状況

山田俊雄（一九七八）は、元禄十一（一六九八）年に刊行された『経書字辨』（乾坤二冊）が経書に使われている語について「常談」によって語釈を施していると謳っていることに着目し、語釈中に使われた漢語を抜き出している。例えば「イツウ（佚遊）」は『論語』に使われている漢語であるが、それを「ブラリトダラケテイケンヲキクトノナイ」（巻上、十七丁表二行目）と説明する。この語釈には「ブラリト」というオノマトペが使われ、同時に漢語「イケン（意見）」が使われている。語釈の調子が整っているとすれば、オノマトペ「ブラリト」と漢語「イケン（意見）」とは、同じ「調子」であることになる。つまり、ここで使われている漢語「イケン（意見）」は「ブラリト」と同じ程度の「わかりやすさ／わかりにくさ」であることになる。そのように考えて、本稿においても、必要に応じてこの『経書字辨』を参照する。

富士谷御杖（＝北辺成寿、一七六八―一八二四）の『詞葉新雅』（二七九二年刊）は冒頭に置かれた「おほむね」において「さ

きにわか父わか兄。此國のことはあきら／めて。くはしくときおけるふみとも多く。世にもさやう／の書数しらすあれと。哥よみしらぬ人の。里言より／古言をもとめむに。とみの便とせむとて。聞おけるかき／り。里言を上とし。古言を下にあて、冊子とす」「事にあたり時にのそみて。つねにいふ詞の。いにしへはい／かにかいひけむとしりかたき時は。やかて此書をとりに出／て。里言の上のものにつきて。其部をもとむへし」「古言里言の別は。かんなど片仮名をもてしらす」と述べている。

右では片仮名で示されている「里言」から平仮名で示されている「古言」を「もとめ」ることが謳われており、「里言」を「俗語」、「古言」を「雅語」と仮に言い換えるとすれば、『詞葉新雅』は「俗雅辞書」であることになる。書名に含まれている「新雅」は「新しい語＝新語」と「雅やかな語＝雅語」とを対応させており、先に引いた「古言里言」という表現を考え併せれば、この書においては、「新語＝里言／古語＝雅語」というような枠

組みで（日本語を）とらえていることが推測される。

『詞葉新雅』においては、「イツバイニナル みつる」（一丁表八行目）のように、「里言」を片仮名で示し、それに対応する「古言」が平仮名で示されるというきわめて明瞭な形式を採用する。右では表示しなかったが、「イツバイニナル」の「ツ」の右傍にも半濁点のような圈点が施されている。これはこれまでも指摘があるが、促音の（積極的な）表示と推測され、「里言」を表示するために、特別な工夫をしていることがわかる。こうしたことも合わせて、『詞葉新雅』においては、「里言／古言」が対照的にとらえられていることがわかる。

その「里言」の中に、次のように漢語が含まれている。五十例を挙げる。繰り返し符号は文字に置き換えて示す。古言が複数示されている場合は、「・」で区切った。漢語欄には里言に含まれている漢語に一般的に使われると稿者が判断した漢字列を掲げておいた。

	里言	漢語	古言	所在
1	イゼンニモ	以前	はやくも・さきさきも	1裏7行目上
2	イケンスル	意見	いさむる・かんだう・かうじ・いましむ	3裏1行目上
3	インギンニスル	慇懃	かしこむ・いやいやしくする	3裏1行目下

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
ヘンクツツナ	ヘイコウスル	ヘンシモ	ヘンポウ	ヘントウウツ	ヘンジスル	ホウビ	ホウコウスル	ニツボンビイキ	ニウワニ	バツクンナ	ハンブン	ハンジャヤウスル	ロトウニタツ	ロケンスル	インキヨスル	インネン	イツカウニ	イチヅニ	イチバイ	インキナ
偏屈	閉口	片時	返報	返答	返事	褒美	奉公	日本鼯鼠	柔和	拔群	半分	繁昌	路頭	露頭	隠居	因縁	一向	一途	一倍	陰気
ひがめる・かたくなし	くちつげむ	かた時も	むくひ・むくふトモ用ベシ	同上 〓 ことふる・いらへする	ことふる・いらへする	かづく・かづけ物	つかふる・みやづかへする	やまとだましぬ	なだらかに	ぬけたる	なかば・かたへ	時めく・さかうる・さかゆく・時をうる	はふるる・さすらふる	あらはるゝ・もるゝ	世をのがるる・世をすつる	すくせ	むげに	ひたに・ひたみちにトモ	いとど	いぶせし・所せし・うもれいたし
12表3行目上	12表2行目上	11裏8行目下	11裏8行目上	11裏5行目下	11裏5行目上	10裏5行目下	10表7行目上	9裏6行目上	9裏5行目下	7表8行目上	7表6行目上	6裏5行目下	6表8行目上	6表7行目上	6表3行目上	6表2行目下	5表2行目下	5表2行目上	4裏5行目上	3裏3行目下

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25
タツシヤニカク	タンキナ	カンジンニシテ	カイホウスル	カウマンブル	カクダンナ	カクベツニ	カウセキ	カウコウ	ガツテンガイク	オクビヤウモノ	リハツナ	リチギナ	リコウソウナ	リクツクサイ	リツバナ	リツシンスル	チワスル	ドウリデ	ヘイゼイ	ヘイユスル
達者	短気	肝心	介抱	高慢	格段	格別	行跡	孝行	合点	臆病	利発	律儀	利口	理屈	立派	立身	痴話	道理	平生	平癒
はしりがき	こころみじかき	えうして	みる・源ニ看病ニイヘリ	思ひあがる	こよなき	ことに・心ことに	たたずまひ	けう	とくおもひしる	おくたかきもの	さとき・さかしき	まめまめしき・まめにトモ	かどかどしき	かどかどしき	おもだたしき・あざやかに	なりいづる・おとなぶトモ	なまめく・なまめきかはす	むべ	とはに・つねに	をこたる病ナリ
33裏1行目下	33表1行目下	29裏7行目下	29裏3行目上	29表5行目上	29表2行目下	28裏1行目下	28表8行目下	27裏5行目上	26表2行目下	22表7行目上	18裏7行目下	18裏7行目上	18裏6行目上	18裏5行目下	18裏5行目上	18裏4行目下	18表6行目上	16表6行目下	12表5行目下	12表5行目上

46	タニン	他人	うときひと・他人ナリ	34表4行目上
47	タイガイ	大概	おほよそ・おほかた	34裏7行目上
48	ソエンナ	疎遠	うとし・うすくなる	35裏8行目上
49	ナンギナ	難儀	わびしき・わづらはし	44表5行目下
50	ムチウナ	夢中	心そらなる	47裏2行目上

例えば、明治二（一八六九）年に刊行され、後に続く漢語辞書に大きな影響を与えたことが指摘されている『漢語字類』において、右の五十語のうちで見出し項目として採られている語は、3「インギン（慇懃）」45「タツシヤ（達者）」47「タイガイ（大概）」の三語のみで、他は、見出し項目として採られていない。つまり、『漢語字類』が見出し項目として採りあげるような漢語ではなかったことがわかる。『詞葉新雅』が出版された十八世紀末に、すでに「里言」とみなされていた漢語は当然明治期においても、そうであったとみるのが自然であると考える。

二 明治時代の状況

二一 『俗語雅調』（明治二十四年刊）

明治二十四（一八九一）年に出版された『俗語雅調』と名付けられた小冊子がある。刊記には「編輯兼発行者 弾舜平」とある。山田忠雄（一九八二）は、この『俗語雅調』について、「前附四丁、本文五十二丁、每半葉十行の小型活版本である。見出しはカタカナ、対応する雅語は双行で注する。その平仮名なるは歌詞、カタカナは文詞と区別してあるのが珍しい。第二音節までイロハ順、改行せず追込みである点は詞葉新雅に等しいが、内容上は大概其の影響から脱しているものの如く判ぜられる」（四九九頁）と述べる。

冒頭に置かれた「凡例」には「此書は／俗語を雅語にひとゝのへらるべくものしたるなり」「雅語には歌によむべきと。文章にかくべきと。さしてわか／ちはあらねど。そのうち文章には音便。また字音などを／用ひたれば。かゝるたくひは。皆片仮字もてしるしつ」とある。

	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	ベツダンニ	ベツベツ	ヘイキ	ボク性ナ	ハツメイ	バチ	ハイスル	ロケンスル	ロウ	ロン	イサイノワケ	イングワ	イツカウ	俗語
	別段	別々	平気	朴性	発明	罰	拝	露顕	楼	論	委細	因果	一向	漢字列
	さらに・ことにさらに	ことごと	さわがす	なほき・すぐなる	さとき・心とき	たたり・むくい	をかむ・をろかむ	あらはるる・もるる	たかどの・たかきや			むくひ・ちぎり	ひたすらに	雅語（和歌用）
	心コトニ		ドウモナク	スグスグシ						アゲツラヒ・アゲツラフ	クワシキユエヨシ		ムゲニ	雅語（文章用）
	五丁表二行目	五丁表一行目	四丁裏九行目	四丁裏四行目	三丁表三行目	二丁裏五行目	二丁裏四行目	二丁裏二行目	二丁裏一行目	二丁表十行目	二丁表四行目	一丁裏九行目	一丁裏七行目	所在

「雅語」には和歌に使うものと、文章に使うものとがあつて、それほどの違いはないが、文章においては、「音便」や「字音」を使うという認識には注目しておきたい。その認識は、文章に使う「雅語」を片仮名で書くというかたちを採らせている。例えば、見出し項目「タシナミブカイ」においては「こゝろにく

き。／＼ウイフカキ」（十四丁裏十行目）とある。俗語「タシナミブカイ」に対応する雅語を、和歌に使う「こゝろにくき」と文章に使う「ウイフカキ」とに分けて示している。この『俗語雅調』が俗語として採りあげている語の中にも漢語が含まれている。次にそれを掲げてみる。

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
カイハウ	ワイロ	ルス	ルラウ	リコウ	リクツ	リンジユウ	リンキ	リツシン	リツバ	リヨグワイ	リカイ	リチギ	リハツ	チュウモン	チンチヨウ	チンズル	トセイ	トンジヤク	ヘンジ	ヘン
介抱	賄賂	留守	流浪	利口	理屈	臨終	愷気	立身	立派	慮外	理解	律儀	利発	注文	珍重	陳	渡世	頓着	返事	辺
たすくる・やしなふ・あつかふ	まひ・まひする	なし	さすらへ・さすらふ・さすらふる	ことろき・いちはやき	ことわり	いまは・身のはて・身のをはり	ねたみ・そねむ・ふすふる	世にいづる・なりいで・なりのほる	はなやか・うつくしく・きらめく(略)	はばかりなく	ことわり	まめ・まめまめし	さとき	あつらへ・あつらふる・あたらへ	めで・めづる	のぶる	わたらひ・世わたり	なづむ	かへし・こたへ・いらへ	わたり・あたり
				カドアル									サカシキ					心ガカリ	カヘリゴト	
九丁裏九行目	八丁裏六行目	八丁表七行目	八丁表七行目	七丁裏六行目	七丁裏五行目	七丁裏五行目	七丁裏四行目	七丁裏四行目	七丁裏三行目	七丁裏二行目	七丁裏二行目	七丁裏一行目	七丁裏一行目	七丁表八行目	七丁表六行目	七丁表六行目	六丁裏八行目	六丁表五行目	五丁表四行目	五丁表四行目

50	タニン	他人	あだし人	ヨソビト	十三丁裏四行目
49	タイセツ	大切	ゆゆし	ダイジ	十三丁裏一行目
48	タイサウナ	大層	いかめしく・きびしく (略)		十三丁裏一行目
47	タイガイ・タイテイ	大概・大抵	おほかた	オホヨソ	十三丁裏十行目
46	タイヘン	大変		思ハズナル事	十三丁表十行目
45	ヨケイ	余計	さは・おほく・あまた		十三丁表二行目
44	ヨクジツ	翌日		マタノ日	十三丁表一行目
43	ヨウジン	用心	心がまへ・心おく		十三丁表一行目
42	ヨウイ	用意	まうけ・いそぎ・心まうけ・心じらひ		十二丁裏十行目
41	ガテン	合点	こころえ・こころう (略)		十一丁裏九行目
40	カクベツニ	格別	ことに・心ことに		十一丁裏五行目
39	カクゴ	覚悟	こころおきて・こころじらひ		十一丁裏一行目
38	カンリヤク	簡略	ことそぎ・ことはぶく		十一丁表七行目
37	カンベン	勘弁	わきまへ・わきまふ・わきまふる		十一丁表六行目
36	カンニン	堪忍	しのび・しのぶる・たへ		十一丁表五行目
35	カツカウ	恰好	かたち・さま		十丁裏九行目

10 「ボク性ナ」は雅語として「なほき・すぐなる／スグスグシ」とあることから推して、「素朴な性質」という語義の「ボクシヨウ (朴性)」なる語を想定したが、『大漢和辞典』は「朴性 (樸性)」を載せない。『日本国語大辞典』第二版も「ボクシヨ

ウ (朴性)」を見出し項目としておらず、語の同定がこれではいかどうか疑問が残る。

明治期の文献になじんでいれば、四十五～四十七頁に掲げたような漢語が明治期においては、上層にはなかったということ

が漠然とではあつてもわかると推測するが、それでもなお、例えば、50「タニン(他人)」が「俗語」とは思ひにくいのではないだろうか。あるいは「リカイ(理解)」はどうか。現代日本語を母語とする者は、「内省」によつてある程度の「感覚」はもち得るだろうが、といつて、現代日本語と同じように明治期の日本語が理解できるわけではない。短いスパンにおいて、語義がどのように変化するかということが十分に考察されておらず、そのボタンが捕捉されていないこともかわつていて考えると、明治期の日本語のように、現代日本語とちかい「距離」にある場合には、「内省」がはたらく反面、「距離」がちかすぎてはたらくにくいということも同時にあるのではないか。明治期の作家が「俗語」として使つた漢語が、現代日本語を母語とする者にはそうはみえていないということはある得る。

二二 服部元彦『雅俗／俗雅』日本小辞典(明治二十三年刊)

次に、雅俗辞書と俗雅辞書とを合わせた『雅俗／俗雅』日本小辞典の俗雅部を採りあげることにする。「凡例」には「俗雅の部は、初学者をして、少し高尚なる国文、又は和歌を綴らんとする時、其の思想を現はすべき国語と、其れを裝飾すべき枕詞とを、引出さしめんがために、其れらを、集め掲げたるな

り」「俗語の下に掲げたる国語は、其の見出の、極めて、大体の意味に当るものなり」とある。ここでは「俗雅の部」が「少し高尚なる国文、又は和歌」を綴るために役立つと述べられており、和歌が視野に入っていることに注目しておきたい。^(註2)「俗雅の部」は当然俗語を見出し項目としているが、同部から見出し項目となつている漢語を抜き出してみる。

	見出し項目	語釈
1	案外	存外ヲ見ヨ。
2	安心	氣遣ヒガ無イヲ見ヨ。
3	案内	あない・しるべ・消息・先達・たづき
4	優美	品ガイ、ヲ見ヨ。
5	委細	つぶさ・つまびらか。
6	一向	むげに・さらに・ひたすら
7	一層	ひときは。
8	因果	すくせ・ちぎり・むくい
9	臆病	おくだかし・おくす・はなじろむ

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
愚痴	キレイ	器量	義理	虚病	華奢ナ	仰山ナ	近辺	機嫌	究屈	堪忍スル	ガマンスル	合点スル	各別ヂヤ	覚悟	狡猾 カウカッ
かたくな。	ウツクシイヲ見ヨ。	ざえ。	ことわり。	そらなやみ。	あて・あてはか・あてやか・ささやか。	いらなし・おどろおどろし・こちたし（略）	わたり。	けしき。	ところせし・うもれいたし	コラヘルヲ見ヨ。	コラヘルヲ見ヨ。	うけひく・うべなふ・おもひしる・こころう。	際 キハ ことなり・こよなし・やんことなし	おもひなる・こころおきて・こころしらび	さかしら。

30	29	28	27	26
頑固	外聞	外国	区別	工夫 クフツ
かたくな。	人ぎき・よそのきこえ。	とつぐに・ひとの國。	あやめ・けぢめ・わきだめ	たくみ・たばかり・したたくみ

二―三 高橋五郎『和漢／雅俗』いろは辞典

高橋五郎は『言海』刊行に先立つ明治二十一（一八八八）年に『漢英／対照』いろは辞典』を刊行し、翌二十二年には『和漢／雅俗』いろは辞典』（以下単に「いろは辞典」と呼ぶことがある）を刊行した。見出し項目には相当数の漢語を採りあげ、また「緒言」において「本辞書ハ西洋字書編輯ノ体裁ニ倣ヒいろは順ヲ追テ毎語ヲ掲ゲ一々其釈義ヲ附シ漢語ノ之ニ相当スル類語ヲ多ク列記シタレバ其搜索ノ語手ニ応ジテ顕レ来リ」と述べているように、語釈において漢語類語を多く示す傾向があると思われる。見出し項目として採られた漢語、語釈中に置かれた漢語類語を「漢」としてくくれば、見出し項目として採られている和語と合わせ、「和漢」という枠組みを形成していると

みることはできなくはない。「漢英対照」の「英」をはずしたものが「和漢雅俗」となることについては、なんらかの説明がほしいところであるが、「緒言」も「雅俗」については述べるところがない。しかし、語釈中に「俗」表示がみられる。

例えば「ゐたく」[俗] (名) 居宅、すまひ」という見出し項目がある。「イタク」は漢語「キョタク (居宅)」の上字を訓読みしたところからうまれた語と覚しく、そのことをもって「俗」とみなしていると推測することができる。あるいは見出し項目「ハツメイ (発明)」においては、「発明、かんがへだす、さとる。(また俗に形容詞に用ふ即ち利口、聡明、鋭敏の意)」とあって、「利口、聡明、鋭敏」という語義で使用する「ハツメイ (発明)」を「俗」とみなしていることがわかる。『俗語雅調』の8はこうした語義の「ハツメイ (発明)」と思われ、この点において『俗語雅調』と『和漢雅俗』いろは辞典の判断は一致していることになる。同じ時期に日本語を使っている人どうしは、いかなる語を「俗語」とみなすかという判断において原則的には一致していることが期待されるが、しかしそれも「判断」であれば、不一致の場合もあることが推測される。幾つかの文献が等しく「俗 (語)」とみなしている語は万人が認める「俗 (語)」であろうが、そうではない場合は、「万人が認める俗 (語)」の

周辺に位置を占める「俗がかった語」ということになる。ここでは、これまでに『俗語雅調』『俗雅日本小辞典』が「俗語」とみなしている漢語について、『和漢／雅俗』いろは辞典がどのようにみなしているかということについて検証してみるところにする。

「いろは辞典」には「かんにん」[する] (自) 堪忍、こらえる、がまんする。又「俗」ゆるす」とある。漢語「カンニン (堪忍)」の語義は〈こらへ忍ぶ・がまんする〉(『大漢和辞典』巻三、二一三頁) である。現在刊行されている小型の国語辞書『三省堂国語辞典』第七版 (二〇一四年) を参照すると、見出し項目「かんにん」[堪忍] の語釈には「いかりをおさえて、相手をゆるすこと」とある。これは現代日本語「カンニン」の語釈としてふさわしいものと思われるが、現代日本語においては、〈がまんする〉から〈ゆるす〉に語義の中心が移っていると思われる。その「芽」は明治期にあり、そうした語義の「カンニン」を「いろは辞典」が「俗」とみなしていると考えることができる。また見出し項目「がまん」[俗] (名) 我慢、いぢ。しんぼう、かんにん」においては、漢語「ガマン (我慢)」を「俗」とみなしているが、語釈に置かれた漢語「イジ (意地)」「シンボウ (辛抱)」「カンニン (堪忍)」がいずれも平仮名で書かれている。

こうしたことについて、「いろは辞典」は何も記していないと覚しいが、これが有意の現象であれば、「漢字を離れた漢語」という意味合いがあるいはあるかと推測する。それぞれを検すると、「いち」「俗」意地、心術、性、こころね、こんじやう、「しんばう」(名)。—する 辛抱、こらへ。こらへる、がまんする「(かんにん)は前引」とあって、「シンボウ(辛抱)」には「俗」とないけれども、「イジ(意地)」と「カンニン(堪忍)」とは「俗」とあり、「漢字を離れた漢語」という可能性は十分にあると推測する。

また、例えば小栗風葉『魔風恋風』前編(一九〇三年刊)に登場人物初野の妹が姉に向かって「ぢや、堪忍して呉れるの?え、姉さん堪忍して呉れて?」(二〇四頁)と言っている。別の箇所には「は。何卒堪忍なすッて。」(然う云ふ事なら、今回だけは堪忍して上げませう)(後編十頁)とある。「堪忍」は複数回みえており、振仮名の誤植とは考えにくい。このことからすれば、「カンニン(堪忍)」が変化した語形である「カンニ」「カニ」が発生していたことが推測される。語義を変化させ、語形を変化させ、漢語が次第にもととの姿を変えて話しことばに入っていくという例にみえる。

「いろは辞典」は『俗語雅調』、『俗雅日本小辞典』とともに「俗

語」とみなしている「ガッテン(合点)」については「がてん(名)。—する(他) 合点、のみこみ、のみこむ、承知」と記しており、この語については「俗」とみなしていない。このように、「俗語」とみなすか、みなさないかについては、文献ごとに、つまりその文献を編んだ人物ごとに、判断が異なる場合がある。

『俗語雅調』は「ヨウイ(用意)」を「俗語」とみなしている。「いろは辞典」には「ようい(名) 用意、こころもちひ。準備、設備、予防、予備、そなへ、したく」とあって、この語も「俗」とはみなされていない。漢語「ヨウイ(用意)」のそもそもの語義は「心をつかふ」(『大漢和辞典』巻七、一〇四五頁)であり、「いろは辞典」の「こころもちひ」はそれに対応するものと思われる。そこから「準備・支度」という語義をうみだしたと思われるが、「いろは辞典」の「準備、設備、予防、予備、そなへ、したく」はそれに対応するものと思われる。

かつて稿者は「明治の中の近世——「準備」と「用意」とをめぐって——」(『国語語彙史の研究 二十四』二〇〇五年、和泉書院刊)において、いわゆる「唐話辞書」において、「準備・准備」が「ヨウイ」によって説明されていること、明治二十年前後に刊行されたボール表紙本に「ヨウイ(用意)」に漢字列「準備・准備」をあてることが少なからずあることを指摘し、「長きに

わたって、先行する借用語「用意」をもって、後から日本語に流入してきたと覚しい「準備」を説くことが行なわれてきたことを示しており、この二語の関わりかたを通して、そうした「漢語の層」があることを確認することができる」(一六一頁)と述べた。その時点においては、新しく借用した漢語を、すでに日本語の語彙体系内に位置を占めている漢語によつて説明する、という経時的な観点からの考察にとどまっていたが、右のようなことを考え併せると、「先行する借用語」は(場合によっては、というのがよいだろうが)「はなしことば」においても使われるといったような、「俗」に傾いている場合もあると考えられる。

「今、ここ」で使っている語彙と、かつて使っていて今使わない語彙とを対照した場合、「かつて使っていて今使わない語彙」が「雅語」と意識されることもある。その場合は、語の「新旧」が「俗雅」に対応していることになる。しかし、「ヨウイ(用意)」が、ある時点で、「俗」に傾き始めたとすれば、「新旧↑↓雅俗」ではないモデルもあることになる。この点については、今後さらに考えを進めていきたい。

おわりに

中国語との接触によつて、その時々中国語が借用され、使用の「実績」を積み重ねていくうちに日本語の語彙体系内に位置を占めるということからすれば、借用された漢語が層をなすことはむしろ自然なことともいえる。つまり、そうした「モデル」は自然なものであると考える。

「漢語の層」はいろいろな「方法」によつて析出することができよう。多賀糸絵美(二〇一二)が草双紙の漢語の分析にあたって用いた「方法」は視野もひろく、一つの「方法」として評価できると考える。仮に、上層を占める漢語群と下層を占める漢語群がつかめたとして、その上層と下層との「関係」もさまざまである可能性がある。先に述べたように、「新旧」である場合もあれば、下層が「俗」にちかづいている場合もある。したがって、今後は、さまざまな文献を観察し、その文献にふさわしい「方法」を使って「漢語の層別化」をはかっていく必要があると同時に、ある「方法」によつて析出された上層(あるいは下層)に位置する漢語群が、他の「方法」によつて析出された漢語群と、どのように重なり、どのように重ならないか

ということにもつねに注目していく必要があると考える。

1 註

2

山田忠雄『近代国語辞書の歩み』(一九八一年、三省堂刊)において小田清雄編輯『「雅俗／対訳」国語のしるべ』(「」は角書きを示し、「」は改行位置を示す)下巻が『詞葉新雅』の「単なる活字化に過ぎない」(五〇一頁)ことが指摘されている。しかし、『詞葉新雅』の「活字化」が『雅俗／対訳』国語のしるべ」が出版された明治二十一年においてまったく意義をもたないのであれば、そもそもこうしたテキストが出版されることはなかった、とみることもでき、そうみれば『詞葉新雅』の記事そのものもおおむねは明治期に「通用する」ものであったことになる。

和歌をつくるということが日常の言語生活に含まれているかどうかというようなことは、その言語生活の幅、過去へのひろがりに影響を与えると考ええる。